

## 登山人口を増やしたい

日本人が日本の山の良さを知るために

山田淳さん

情報と道具ときっかけがあれば、もっと多くの人々が山に向かうことが出来るはず、と登山用品のレンタル事業を立ち上げ、HAT-Jの東北応援プロジェクトにも無償で登山用品の貸し出しをしてくださっている山田淳さんに、安全登山から環境までを繋ぐベンチャー魂を伺いました。  
(インタビューと文：張晶子)



◆ どんな子ども時代をすごしましたか？

一 小学校2年生の時、ぜんそくで2回、1ヶ月以上の病欠をしました。学校は楽しくて好きなのと、体育の授業に参加出来ない子はヒーローにはなれませんか。頭で生きて行こうと決めたのは3年生の時でした。灘校という日本の学校が近くにあると知り、4年生からの3年間、一分一秒も無駄にせず勉強しました。休み時間も受験勉強をしていると、周りからも、先生からも好意的に受け取られませんかから、学校はキライなところになりましたが、目標に向けての最短距離に全力で取り組むことをこの経験から学んだように思います。

◆ 大学在学中にセブン・サミッツを目指したのは？

一 当時は、セブンサミッツはすでにパイオニアワークでは無くなっていました。ヒラリー卿や田部井さんの時代とは違っていたのです。

大学山岳部も廃部寸前。合宿もなく、自分のチャレンジすることは自分で決めていかねなければなりませんでした。ヒマラヤへの憧れだけは持っていたので、最終的にエベレストが待ち構えるセブンサミッツは非常に魅力的でした。とはいえずでにパイオニアワークではないので、過去に積み重ねられた成果や情報を利用して、達成する対象として取り組んだのです。冒険家としてではなく、アスリートとしてのエベレストでした。登るために存在するハードルを6項目課題化し、それを解決するための方法を考え、研究し、トレーニングも考えました。例えば、アスリートの身体として、脂肪と筋力のバランスはどこにあるかです。高所登山に必要な筋力は、長期間の登山を耐久するため脂肪を重力に抗い持ち上げるための最低限の筋力があれば良いと考えました。上部に少し出て来る岩場を越えるには、時間をかけ山に行って岩登りの練習をするより、梯子が安全に登れる程度のバランスと体幹筋力があれば良いので乗馬をやりました。ゴールに対してソリューションを考える。つまり、ロジックで登れることを証明したかこの方法をとっていると思います。登山が好きというよりは人が好きです。単独で登るより、人とコミュニケーションをとりながら登る方が楽しいと思います。だから、ガイドは天職だと思っています。地元で根ざしたフィールドガイドを基本として、富士山・屋久島・キノバル・キリマンジャロを中心にガイド活動しています。

◆ 山に関連したビジネスを起業したのは？

— もっと多くの人に山に行ってもらうには、情報と道具ときっかけが必要だと考えました。ですが、その前段に、日本のこれからの産業

の中心に観光業の成熟が必要なのではないかという考えがあります。国土の70%を山が占めています。労働人口が減る中、生産性を高めるには新たな産業で補うことが必要です。日本の自然の良さというのは、日本の大きな強みです。観光業は、これからの日本の成長産業のひとつだと思っております。そのために、まずは、より多くの日本人に日本を山の素晴らしさを知って欲しい。海外からの人を呼ぶにも、日本人が日本の山を楽しまなければ、海外の旅行者を呼び込むことなんてできません。登山人口の増加という、すぐに環境のことを心配する声が上がりますが、観光業というのはそもそも環境を守らなければならない産業です。市場経済の中で環境問題も解決するべきで、今の、補助金や良心に頼るだけでは「環境」は守りきれない時代になると思っています。この業界を将来的には、社会を変え、社会に貢献するという意識のある人を養える業界にしたいです。そのために、自身でこの業界での起業が可能であることを証明しなければならぬと思っています。レンタルで儲けているいると言われますが、収入は「マッキンゼー時代の半分以上」になってますよ（笑）。

◆ 登山界は多様に変化していますが、安全登山についてはどうお考えですか？

一 ガイドツアーの事故が問題視されていますが、最終的な責任は会社にあるはずですが、現地にいるガイドは、判断するための情報は会社に上げる必要がありますが、最終的な判断は、責任が取れる人間がやらなければなりません。そのために、会社はどんな所でも衛星電話なり持たせて情報を集められる体制を作る必要があります。個人ガイドなら勿論全ての責任はガイド個人にあります。登山者の質の向上も言われていますが、世

